

郷土室だより

八町堀襟記 三

安 藤 菊 二

〇八丁堀の七不思議

本所辺の七不思議になると、天井裏から毛むくじらの脚がぬっと出たりするのだから不思議話の一つに数えても不思議はない。それに比べると八丁堀の方は、ねっから不思議でないことに、話の落をつけて喜んでいるのだから他愛もない。それにおなじ七不思議も語り手に若干相違がある。どれが正説だと力むほどのこともないが、元八丁堀与力佐久間長敬翁の「嘉永日記抄」に載るものは、さすがに真実味が籠っていて、これは正説だという感じがする。ここに原文のままお目にかけますからお読みになってください。

七不思議という事、第一に「奥様殿様なし」。これは、与力の妻を奥様奥様と敬語を用い、而も主人を旦那様といて殿様とはいわず。江戸時代殿様というは御目見以上を呼ぶ敬称ゆえに、いかに与力は僭上の振舞ありとも、殿様とはいわぬ也。

第二に「女湯に刀掛がある」。これは、其始め同心の足洗てふ名目なりしもの、竟に衆人の入る銭湯と変りしこととて、同心は朝の内ばかり女湯に入るゆえ、必要の為刀掛ありし也。

昔侍は門口を出るに一刀のことなし。組屋敷内の風呂場へ行くにも、兩刀さしゝ也。湯あがりの単物、ぬか袋、あかすり、手拭など小脇に抱行く、同心の家族という名目にて婦女子は入りしが、男女混浴は市中一般に禁じおき、組屋敷内に限ってかか

る体ありし也。

第三に「ドブ湯」これは前述せし風呂屋也。元は足のみ洗ふためなりしを、ドンブリ入るといへる語約まりてドブと云し也。

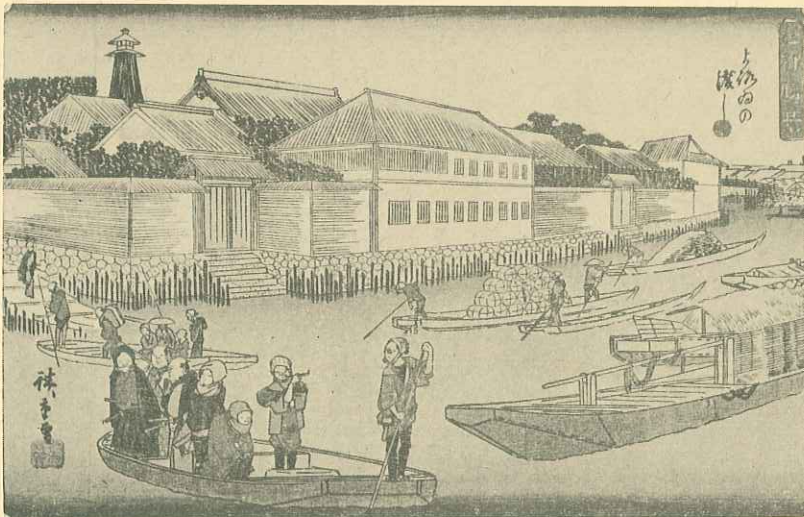
第四に「鬼の住居に幽霊が出る」。これは、前出せし幽霊横町のこと也。鬼とは与力同心をいう也。

第五「地蔵の像がなくして地蔵橋がある」。これは、組屋敷内に石の橋架けあり、旧与力多賀仁蔵の門前ゆえに、一手持自分普請にて架けたる石橋を、仁蔵橋と称来りしが、其家潰れし後、与力共同持にし、地蔵橋と改称せしとも云い、また昔橋際に小さき石地蔵ありしが、大火のため焼崩れしとも云う也。

第六に「百文あれば一日快樂のできる土地」これは、彼の貧乏小路に住める者の言な

り。渡し舟渡るを船遊びといい、入湯・髭剃り・めし・さけ・其余たかが最下等の快樂也。

第七に「一文なしで世帯が持てる土地」。これは彼脊割長屋に入ると敷金



も道具もいらず、一日稼ぎて幾らか手に入れれば、一膳飯屋で腹をふさぐる、飲みたき者は酒屋の見世先で櫛を冠る也。ちよつと塩舐て、したみの五合に虫をおちつくる。折ふしに火事あれば出役の同心の後追つて其場に駆つく。布団一枚くらいとるは見逃し也。八丁堀同心の長屋に住みて、多少其顔を見知られしを、彼らは私かに得意せしと也。

第四の「鬼の住居に幽霊が出る」の説明に、「前出せし」とあるのは、この記事に先立って「貧乏小路」や「幽霊横町」の記事があるからであつて、幽霊横町について「名の如く両側は与力屋敷の高い板塀、てうど誹向きの開い新道にて、夜な夜なしらしらと、しられたる首どもとび出し、通行人の袖ひきとめしなど、怪談もありし也。」と書いてある。

そして「貧乏小路」については、まこと貧民窟なりと記してある。

この横町に住む同心のうちに、自分の拜領屋敷内に脊割長屋を作る者があり、軒並み脊割長屋のスラム街ができってしまったので、すでに早く、安永四年版吉文字屋次郎兵衛版「築地八丁堀日本橋南絵図」にも、地蔵橋に近い竹島町の南側に「百間長屋」と記されている。

脊割長屋はこけら葺の平屋で、間口は九尺、奥行二間、表は兩戸式枚、踏込は土間で、部屋は三畳一間、裏は三尺のあげ板敷、兩戸一枚建つばかり、安普請だが、家賃も安く、日掛五〇文ずつであつた。

路次は三尺隔てて、幾棟も建込んでいたから、貧乏長屋の称があつたのである。

ここに住むのはその日稼ぎの者で、男女ともに与力同心の家に出入するかあるいは与力の下男などに懇意な者が多かつた。それゆゑ、沢庵・漬菜の類を貰つたり、来客の食剩しもののごときも、持つて来てもらへた。

そのかわり、中間小者の衣類の洗濯などは、この連中が引受けていたので貧民窟といつても、場末のそれに比べるとずいぶん気安いところであつたとある。

家に女中の七・八人もおき、兩刀を帯して、着流しの雪駄ばき、一目でそれと見てとれる、八丁堀の旦那衆の住む町のすぐ近くに、こうして吹溜りの人生があつたことを、与力は八丁堀の七不思議の中に数えていたのである。

4 大名屋敷

○牧野氏藩邸とその庭園

海運橋以北の兜町一株式取引所や第一銀行のある地区は、江戸開創の当初は要衝の地なので、御船手頭向井將監がこの地を占め、睨みを利かせていた。承応江戸図を見ると、その地に「牧野佐渡」と記し、向井將監の邸地は牧野氏南の後の茅場町一丁目の地に移っている。牧野氏は、丹波国加佐郡田辺の藩主で三万五千石を領し、幕末までこの地にあつた。

藩の沿革について、新人物往来社刊『藩史総覧』に據り、要約して記すと田辺（舞鶴市）周辺を領有した譜代小藩。慶長五年（一六〇〇）末、豊前中津城へ転出した細川忠興のあと、関ヶ原の戦功により加封された京極高知が入国し、高直・高盛と在封し、寛文八年には但馬豊岡へ移封となつた。京極氏の去つたのち、京都所司代の要職を退任した牧野親成が、摂津国内から三万五千石で入封し、そのあと、富成・英成・明成・惟成・宣成・以成・節成・誠成・弼成と十代、廃藩に至る二百四年にわたって在封した。この間、小藩ながら、歴代のうちで幕閣に列する者多く、富成は奏者番、英成は奏者番・寺社奉行・京都所司代、明成は奏者番、惟成は奏者番・寺社奉行、誠成は奏者番を、それぞれつとめていた。（同書二七二頁）

茅場町の牧野氏邸について、東京市史稿、遊園篇第二（九〇二頁）に、日記慶安三年六月廿六日ノ條「牧野内匠成、隱居領跡式、中居屋鋪并八丁堀下屋敷ハ佐渡守。牧野佐渡下之」と見ゆる下屋鋪是なる可し。其地往古江戸絵図「向井將監」と記し、承応江戸図には「牧野佐渡。親と有り。庭園は「此園既成、經三百余年」と云へば、或は貞享元禄頃の築造に係る如きも、今年次を詳せず。」

と考証し「文化六年四月、田辺城主牧野以成守。豊前太田元貞。錦を以て茅場町邸の園池記を作らしむ」との項目をたてて、錦城の「田辺牧野公邸園池記」を掲載している。その邸園記は「中央区史上巻」に、原文のまま掲記しておいたが、ここには改めて仮名交り文にして記しておこう。

三代三は尚し。兩漢以降、王侯大臣の家、競つて園池の勝をもつてあひ尚ぶ。いわゆる擬堵、金谷、緑野、平泉、南園、秋壑の類、史伝記す所、殫して数う可らず。其の人賢愚不同有りと雖も、然し皆富貴に処し、權利を招く。禍は則ち踵を旋さず、其の身首且も保つ能わず。何ぞ況んや園池の勝は、之れを子孫に伝うるを得んや。

我邦承平茲に二百年。諸侯邸宅、皆山

林園池の勝有り。而して子孫永く之を保つ。李贅皇がいう所の、一草一木を傷つくる者は吾が子孫に非ずとは、彼に在らずして此に在り。

昔者、李格非は、洛陽園面の興廢を以て天下の治乱を候えり。予も亦、江戸園池の旧きを以て、東照神徳の速きを

田辺城主牧野公邸は萱街にあり。其東南開いて園池を為す。園の大勢は、池正中に在り。東南は則ち林鬱連互。西北は則ち平衍。以て公堂に接す。階砌には種うるに結縷草を以てし、雑うるに紫花兒、蒲公英を以てす。錦補繡展、絢慢見る可し。

池の北、書斎茶室在り。窓外は芭蕉叢を為し、稚松二株、蔽として相對する如し。小風行を為し、嫩葉火の如く、煥赫目を射る。是も亦二月の花なり。

池の東西は奇石を駢立し、以て岸と為す。東岸の石、最も瑰偉為り。或いは雄抜峻峙、或いは偃蹇離睡、異態百出。彈して記すを得ず。雲紋雨点、蘇封じ蔓絡らみ、嘉樹美草、膠輻蒼翳、謂わゆる幽處雲を生ぜんと欲する者なり。

池暗溝を作り、甲渡に通ず。潮汐往来。開有りて其の水を吞吐す。深靛擊磬、蹙みる可く洗う可し。薄絲蘋葉其の間を連綴す。池、鯉魚多し。倏急聚散、潑澗跳躍し、遊者と相楽しみ、人をし

て濠梁間の思い有らしむ。池西一小石有り。海參と曰う。形似たるを以て名を得たるなり。潮落つれば則ち見ゆ。池の西南は曲岸池中に突出し、危石峭峙す。其の文は皴雲駁霧、畫家の皴法に入る。最も愛す可し。上に小祠あり。辨才天女の像を安んず。石間箬葉叢を為し、松有りて斜に水面に偃す。渴猿臂を伸し、水を掬して飲むが如くなり。

池の西北は長塘逶迤、水中に横互す。塘盡き長橋架かる。東岸山を右にし、南行纒數十歩にして、池山の根を噛み、路窮つて板橋架る。橋辺の石罅には、琴瑟盛んに黃花を著く。

橋を過ぐれば則ち山路はより始まる。池の東、連山重巒、深林茂樹、蔚蒼幽情仰いで天を見ず。其の樹は則ち楠樟、椰子、冬青、丹青を多と為す。桜花数樹、紅白躑躅、その他嘉樹は復一々之れを記すを得ず。樹間鳥声、嚶々々々、人の耳根を浄め、復絲竹の比す可きに非ざる也。風山林の間に入れれば則ち花噪ぎ、葉戰ぎ、紛紅駭緑、また奇観なり。

若し夫れ山路にいたっては、崎嶇、或いは上り或いは下り、石は人の足を噛み、樹は人の衣を鉤す。魚貫して進む可く、駢列雁行する能わず。山腹石有り、高さ七・八尺。名ずけて胃石とい

う。伝えて言う。源大將軍義家東征の日、胃を比に懸て以て戰勝を祈ると。今邸後の津、名ずけて甲の渡と曰う。伝者或いは信ならむ。

山の極南は最も高処にして、平坦数十人を坐せしむ可し。萱街を下俯すれば垣外の行人、往來織るが如し。毎月八日・十二日、萱街萊師佛寺、香火者群集す。花市有り。紅紫樹に滿つ。是れも亦其の園の壯観なり。池の極北、別に小支を為し、石梁水中に横絶す。極南も亦小支を為し、石橋架る。橋南山を穿つて路を通ず。劃然中開す。謂わゆる巨靈斧劈する如き者なり。園の西南隅多く花樹を栽す。梅花・桜花・海棠等、花時皆盛んに花を著く。亦此の園の偉観なり。

之れを要するに、此の園既に成つて、百余季を経たり。是の故に其の規制古雅愛す可く、樹石も亦老蒼見る可く、暴富驟貴の家の、唯壯麗を事とし、要は鄙俗に帰する如きに非ざるなり。

田辺今侯は、賢明学を好み詩を能す。己巳三月、其の臣森本信保に命じ、予に賜いて其の園に遊ばしめ、又辱くも之が記を命ず。予竊におもえらく、今の諸侯は朝府に朝覲し、上に事之下を御し、其の務も亦勞せり。勞して已まざれば、則ち疾む。既に其の心神を勞すれば、則ち亦、性を頤し情を樂まし

むること無かる可らざるなり。皓園曼理、情を悦ばしむれば精を損す。醇酒旨味は、口に甘けれども腸を腐らしむ。皆性を頤するの道に非ざるなり。其れ唯山水魚鳥の観か、以て情を樂ましむ可し、以て性を頤す可し。此の園の山水は宏大に非ずと雖も然も此れも亦壺中の天地。晴に宜しく、雨に宜し。雪月に宜く、煙花に宜し。千姿万態、奇を呈し秀を獻じ、几窓の前に攢る。公暇日此に對すれば、則ち万象畢陳、胸次豁然、心曠く神怡しみ、百慮皆浄からん。是も亦道に通ず可し。嗚呼是豈特に耳目の娛しみたるのみならんや。

文化六年歲次己巳四月二十三日。田辺侯邸も、文政十二年（二八二九）の佐久間町火事に類焼した。「甲子夜話續篇」に、この度の火災に諸侯よりして市家の富商にいたるまで、焼け損ぜぬものがほとんどなかったのも、今次の大火の怪事に数えられるとして、

○この土蔵の事に就き見し人の語りしが、海賊橋田辺侯の邸は、是まで類焼せざる処と云伝ふ。邸後は川に添ひて火難き地ながら、この度は土庫二十戸皆焚亡し、米倉一棟残りしとぞ。行路の人望み見て、大名屋敷の原になりしは初めて見たり迎咄過

しときく。

と記しているから、邸は全焼し、園林も手痛い被害を受けたに違いない。

大火から四・五年経た天保中期の、

川正版大判横絵版画「江都勝景」中の

「よろみの渡し」には、すっかり復興した牧野邸の東南角地の風景が描かれていて、当時をしのぶことができる。

幕末の『諸家人名録』を換すると、

田辺藩出身の儒者、嶺田楓江や野田笛浦らは、この藩邸内の居屋敷に住んでいたごとくである。それらのことどもは、地区居住の人物群像を書く時に触れるであろう。

〔注解〕

(一) 三代。中国古代の夏・殷・周の三王朝。

(二) 前漢。(イ)漢の劉邦(漢の高祖)が、秦を滅ぼして建てた。後これを

「前漢」または「西漢」という(前二〇六〜八)。(ロ)劉秀が新を滅ぼして建てた。のちこれを「後漢」または「東漢」という。

(三) 金谷。晋の石崇の別荘のあった地。今の河南省洛陽県の西に在る。

(四) 緑野。唐の斐度の別荘の名。旧唐書、斐度伝「於三午橋創別荘。花木万株。中起涼台暑館。名曰緑野堂。」

(五) 平泉。河南洛陽県の南にあり。周回四十支那里。唐の李徳裕の別荘。

(六) 李格非。宋の済南の人。字は文叔。進士に挙げられ、累遷して礼部員外郎となる。かつて「洛陽名園記」

を著わしている。洛陽の盛衰は、天下治乱の候なりと。その後、洛陽陥る。世以て知言となす。(中国学藝

辞典)

(七) 洛陽。中国古代の都の名。洛水の北にある故の称。河南省河南府。周の平王が始めてここに都し、東漢一代および五代(梁・唐・晋・漢・周)もまたこの地を都とした。

(八) 田辺。丹後國加佐郡田辺(京都府舞鶴市)

(九) 牧野公。初代親成、京都所司代辞任。河内高安から移って田辺藩主となる。後、加封を重ねて三万五千石となる。十代頼成に至り明治維新に会す。

(一〇) 萱街。萱は、葦に似た宿根草。國訓カヤ。茅場町の当字。茅場町に住居した荻生徂徠は、萱字の音をとって別号を護園と称した。それ故、徂徠が鼓吹した古文辞学派を護園学派という。

(一一) 林らん。林の峯。林の頂き。

(一二) 平衍。衍は水の海にそそぐさま。あふれる。

(二三) 階砌。階段の石だたみ。

(二四) 結縷草。高麗芝。

(二五) 紫花兒。れんげ草。

(二六) 蒲公英。たんぽぽ。

(二七) 絢。きらびやかで美しい。

(二八) 嫩葉。柔らかい葉。

(二九) 煥赫。あきららかに燃え上る火のように。

(三〇) 二月の花。杜牧の詩句に「霜葉紅於二月花」

(三一) 瑰偉。すぐれて大きい。

(三二) 雄拔峻峙。雄大で群を抜き、高くそびえる。

(三三) 偃蹇。おごりたかぶるかたち。転じて、奇怪な形をした岩石の形容。

(三四) 臃腫。はれもの。しゆもつ。転じて、木などのふしこぶ。

(三五) 轆轤。車が、からからぶつかりあうさま。後になり先になりぶつかりあうさま。

(三六) 薺。生いしげり、おおいかぶさる。

(三七) 闌。時々開閉する水門。

(三八) 深颯。深く静。

(三九) 鑿徹。明らかに透きとおる。

(四〇) 蘋。浮草。

(四一) 倏急。たちまち。

(四二) 海參。いりこ。海鼠(なまこ)を煮て干した食品。

(三三三) 峭峙。きわだたつてそばだつ。

(三四) 駁。まだら。

(三五) 箬。くま笹。『和漢三才図会』には岡藪とする。

(三六) 長塘。長い堤が曲りくねって。

(三七) 石か。石のわれめ。石のすきま。

(三八) たくご。つはぶき。

(三九) 蔚蒼。草木の盛んに茂るさま

(四〇) 倩。うるわしい。

(四一) 冬青。もちのき。常緑樹。夏初白花を開き、皮はとりもちを作る。一説に、まさき。又云、玉つばき。

(四二) こうこう、かつかつ。共に鳥の鳴き声。

(四三) 絲竹。琴と笛と。

(四四) 崎嶇。山路のけわしいさま。

(四五) 魚貫。魚を串に貫いたように連らなる。

(四六) 甲の渡。通称は鍔の渡し。

「中央区年表」刊行のお知らせ

待望の「江戸時代篇」が、安藤菊二氏の編集により刊行となりました。今回は上巻で、家康入府の天正一八年より八代將軍吉宗時代の享保二〇年までを収めてあります。郷土資料室で、閲覧・貸出が出来ますので御利用ください。